

沖合漁場整備対策調査

森脇晋平・齋藤寛之・為石起司

1. 調査目的

地形的条件により日本海に流入する流れ藻は本海域に集積、滞留し、本海域がそれに付随する多種類の魚類幼稚魚の重要な着底海域となっていると推察される。

そこで隠岐海域における流れ藻付随性魚類の育成場整備の可能性について予備調査を実施する。

2. 研究方法

(1) 流れ藻調査

まき網により5月下旬から7月にかけて隠岐周辺海域と浜田沖で流れ藻を採集し、付随性魚類の種組成・体長組成を比較した。浜田沖から隠岐諸島周辺海域における流れ藻の分状況について目視により調査した。

(2) 標本船調査

隠岐島周辺のモジャコまき網着業船に操業場所の記帳を依頼してモジャコの漁場分布を調査した。

(3) 海況・流況調査

流れ藻の輸送盛期の6月における隠岐島周辺海域の海洋構造を調査した。流況は試験船のドップラ-流向流速計により行い、10 m、50 m、75 mの3層の平面的な流向・流速を観測した。

3. 調査結果

(1) 流れ藻調査

浜田沖と隠岐周辺海域で採集した流れ藻に付随していた26種の魚類を確認できた。産業的に重要な魚種はブリ、メダイ、ウマヅラハギ、カワハギ、クロメジナ、ウスメバルであった。海域毎の出現パターンを明らかにした。

4月下旬から6月上旬にかけて目視による流れ藻分布調査を実施した。5月上旬から下旬にかけて出現のピークがあるように思われる。隠岐海峡での分布域を示した。あわせて実施した計量魚探による魚群分布調査によるとマアジ幼魚と推定される魚群が出現し、その分布は調査海域の南～南西部に分布が偏っている傾向がみえる。

(2) 標本船調査

ジャコまき網標本船の操業位置をみると、モジャコ漁場は隠岐・島前海域周辺一帯にみられるが、南西部から南東沿岸域にやや偏っているようにみられる。

(3) 海況・流況調査

水温・塩分の水平分布図(上・中・下層)と ADCP による流況をみると6月25日は全層で西向きの流れが卓越していたが、翌日は中・下層では南向きの流れが卓越し、上層では時計回りの渦流がうかがえる流況であった。

4. 調査成果

- 調査で得られた結果は、日本海中部沖合漁場調査検討委員会で報告した。
- 沖合水産資源の持続的利用のための漁場整備対策調査に利用された。